

西東京市 図書館だより

平成24年(2012年) 1月15日

第44号

中央図書館

西東京市南町5-6-11
042-465-0823

保谷駅前図書館

西東京市東町3-14-30
042-421-3060

芝久保図書館

西東京市芝久保町5-4-48
042-465-9825

谷戸図書館

西東京市谷戸町1-17-2
042-421-4545

柳沢図書館

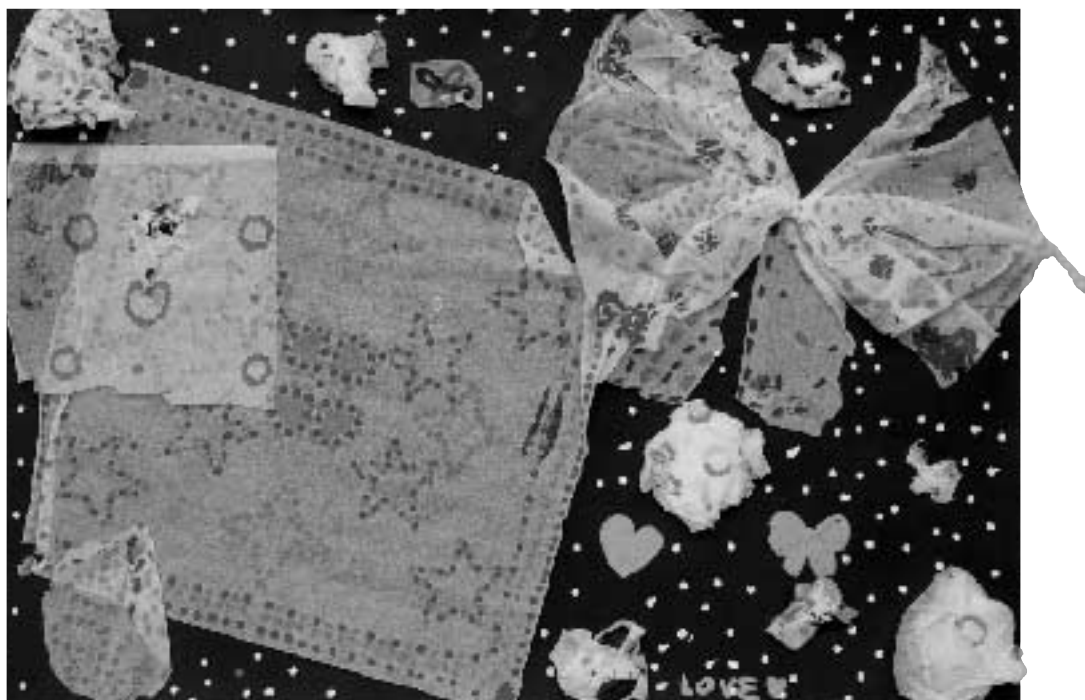
西東京市柳沢1-15-1
042-464-8240

ひばりが丘図書館

西東京市ひばりが丘1-2-1
042-424-0264

編集・発行:西東京市図書館

ホームページアドレス <http://www.library.city.nishitokyo.lg.jp>



ふしぎな世界

栄小4年

『市民の図書館』から四十年

昨年十月、多摩地域で第九十七回全国図書館大会が開催され、「市民の図書館」や「図書館評価」などの分科会で議論を深めました。また、十一月には、戦後すぐの図書館の改革に携わった、当時の日本図書館協会事務局長有山崧氏の生誕百年記念シンポジウムが開催されました。有山氏が一九六五年に日野市長に当選すると日野市立図書館長に前川恒雄氏(後に滋賀県立図書館長)が招かれ、移動図書館車による貸出サービスが始まりました。閲覧中心だったわが国の図書館では画期的な活動で、一九七〇年に、この日野市の実践を基に公共図書館の新しいモデルを示した『市民の図書館』が刊行されると、貸出中心のサービスが全国に広まっていきました。それから四十年、すでに日野市の実践は神話化されつつあります。同時に、貸出重視への批判を踏まえた新たな公共図書館像が模索されています。

西東京市図書館では、合併以来、貸出冊数の上限の拡大、インターネットを利用した資料検索や予約・リクエスト受付サービスの開始、ICタグ資料管理システムの導入による自動貸出機・自動返却機・予約棚の設置等の機械化を順次進め、よりスムーズな資料の貸出・返却に努めてきました。その結果、カウンターワークの中心が貸し出しから調査・相談活動へと変わっています。

二十一年度から始めた、図書館サービスを自己評価し、その結果を図書館協議会が外部評価する「図書館評価」でも、その評価対象が量から質へと転換しています。子どもや高齢者への行き届いたサービス、地域情報の収集・再構成・発信、調べもののサポートや読書案内などのレファレンス機能の充実が問われています。

今後、計画を実行し、その結果を評価して次のステップへとつなげていく、いわゆる「Plan」―「Do」―「Check」―「Act」のマネジメントサイクルを実践し、『市民の図書館』がめざした公共図書館像から次の段階へとつながる具体的な活動を展開していきます。

★声の広報をお届けしています。

お問い合わせの方でご希望の方がいらっしゃいましたら
谷戸図書館(☎421-4545)へお問い合わせを

平成22年度 図書館事業評価の概要

事業計画に基づき、平成二十二年度の図書館事業評価を行いました。成人・児童・地域行政資料・レファレンス・ハンディキャップ等の各サービスや情報システム、図書館資料の収集と保存等、全二十項目について、図書館内での自己評価(一次評価)を行ったうえで、図書館協議会に数値指標と一次評価結果を提出し、二次評価を受けました。今回は、昨年度の五十一項目を見直し、項目数を絞りました。

評価はA～Eの五段階で行い、二次評価では、二十項目中評価A(事業計画にある施策事業をおおむね達成した)が十項目、評価B(一部達成し、さらなる充実を図っていく)が十項目という評価を受けました。評価C以下はありませんでしたが、一次評価の自己評価に比べ図書館協議会の二次評価が高い項目は六項目、低い項目は二項目でした。十二項目は両評価が一致しました。

《二次評価の概要》

一次評価と二次評価が異なる項目について、図書館協議会の評価内容の概要を紹介します。
自己評価よりも高く評価された内容は次のとおりです。

① 図書館資料の提供において、全国トップレベルの高水準を維持している。

② 市民の読書活動の援助として、団体貸出の利用が活発で大きな効果を発揮している。

③ 児童サービスの推進において、各種共催事業への講師派遣等を活発に行い、また、おはなし会の実施も昨年度より増加している。

④ ヤングアダルトサービスの推進において、『CATCH』共同編集の試みに着手している。

他方、自己評価に比べ、図書館協議会の評価が厳しかった項目では、次のような指摘を受けました。

① ハンディキャップサービスの推進において、日本語の使用が不十分な在住外国人等、図書館利用に障害のある人たちへのサービス(多文化サービス)の充実を図ることが必要である。

② 地域・行政資料サービスの推進において、西東京市の資料の収集・保存・提供は他に委ねられないが、資料の保管スペースが絶対的に不足しており対策が必要である。

図書館協議会からの評価については、今後の図書館事業の課題として、検討していきます。

なお、この図書館事業評価の結果は、館内に掲示してあります。また、図書館ホームページでもご覧になれます。

を語ろう」が実施されました。とりあげた絵本はセンダックの『かいじゅうたちのいるところ』で、二人のコーデイナーの進行のもと、和やかな雰囲気の中で、三名の高校生が一冊の絵本をじっくりと読み込むことを楽しんでいました。

乳幼児向けの催しは二か所で行いました。小ホールのロビーでは、市民ボランティアグループによる「紙芝居」パネルシアター「絵本の読み聞かせ」があり、参加者には乳幼児用スタンブカードにスタンブを押しました。パネルシアターは初めて見たという大人の方もいて、好評でした。オリジナルの郷土紙芝居や市民団体による講座で学んだ小学生による紙芝居の実演、クリスマス絵本の大型絵本の読み書きかせなどバラエティーに富んだ内容で、席はいつもいっぱいでした。音楽練習室では、市民ボランティアによる人形劇公演とわらべうた遊びを行いました。お父さんの姿も多く見られ、入りきれないほどの親子連れが、部屋いっぱいに広がった大きな輪の中でわらわうたを楽しんでいました。



「子どもの広場」ワークコーナー

大人向け企画報告

内田麟太郎氏を追って 「パネル展と講演・対談」

大人対象としては、パネル展示と講演・対談を行いました。
パネル展「目で見る西東京市子ども



開催しました 教育委員会主催・西東京市子ども読書活動推進計画策定記念行事

子どもの本まつり ～子どもと本をつなぐために～

十二月三日(土)、保谷こもれびホールを会場に、「子どもの本まつり」子どもと本をつなぐために」を開催しました。この行事は、平成二十三年三月に策定した「第2期西東京市子ども読書活動推進計画」を広く市民のみなさんに知っていただくことを目的としています。実施にあたっては、第2期計画策定に携わった市民を中心に組織した実行委員会の協力を得ました。

また、当日は、市内で子どものための読書活動を行う団体の市民ボランティアや多摩六都科学館に所属する雑木林プロジェクトチームのメンバー、武蔵野大学で司書課程を学んでいる学生など合わせて約六〇名の方々が、スタッフとして運営を担ってくださいました。その中で情報交換を行うなど交流する姿も見られ、

も読書活動推進計画」は、午前中から、保谷こもれび小ホールのロビーで行いました。「西東京市子ども読書活動推進計画」についての説明のあとに、行政の取り組みとして、学校、保育所(園)、児童館・学童クラブ、図書館が作成したパネル、続いて、子どもの読書に関する活動を行っている十九の市民団体作成の紹介パネルが並びました。市民のみなさんの力の入ったパネルは来場者の目をひいていました。

午後は、絵詞(えことば)作家の内田麟太郎氏をお招きして、講演「絵本があつてよかったな」と対談「絵本があつてよかったな」子どもと本をつなぐために」を行いました。内田氏は「ナンセンスもの」と呼ばれるような作品が多く、絵本、物語、詩といるいろいろなジャンルの作品を創られています。「ともだちや」シリーズなど、子どもたちだけでなく大人にも人気の作家とあつて百二十名を超える参加がありました。

前半の講演の内容は作品ができるまでの話が中心で、プロジェクトに見ながら楽しく聞くことができました。「ともだちや」という作品は、「ともだちや」といっていいなと思わせてくれる内容と降矢な氏の絵がとてもあつていますが、「ともだちや」ということが頭に浮かび、そこからストーリーを考えたそうです。「がた

団体同士がつながりをつくるきっかけともなったようです。
多くの市民に足を運んでいただくために、子ども連れでも参加しやすいよう、午前は子ども、午後は大人と、対象別に複数の催しを行いました。多様な催しを企画・実施できたのは市民のみなさんの協力があったからこそと感謝しています。
天候に恵まれなかったにもかかわらず、参加者は午前午後合わせて三〇〇名を越え、市民のみなさんに「第2期西東京市子ども読書活動推進計画」を知っていた、たぐい機会となりました。

これからも、市民や関係機関と手を携えて、計画をより豊かに実施していくよう、努めていきます。

子ども向け企画報告 「子どもの広場」 「赤ちゃんから高校生まで」

あいにくの雨の中のスタートとなりましたが、午前中の「子どもの広場」の会場は、にぎやかな子どもたちの声であふれました。子ども向けの催しは年齢別に数か所で行いましたが、子ども、大人合わせて一八七名の参加がありました。

保谷こもれび小ホールには、小学生向けのワークコーナーを三つ設けました。科学遊び「風で飛ぶ種の模型を工作しよう!」、写真のフィルムケースを使った工作「キミだけの字



対談「絵本があつてよかったな」

ごとがたこと」の画家、西村繁男氏との交流なども興味深く聞きました。

後半は、昨年度策定した「第2期西東京市子ども読書活動推進計画」策定懇談会委員の座長としてご尽力いただいた武蔵野大学教授の宮川健郎氏と内田氏との対談でした。宮川氏の質問に内田氏が答えるという流れで進みました。内田氏の「ナンセンスとは、言葉の意味を、物」として一度ばらばらにしてまた新しい「物」を作る。秩序は大事だが、それだけでは息苦しくなるので、そこから逸脱していくナンセンスが必要という言葉が印象に残りました。

合わせて二時間という短い時間でしたが、笑いが絶えることはなく、子どもたちをひきつける内田氏の作品の楽しさは、そのお人柄から生み出されるのだと感じました。

私は図書館をよく利用します。家には図書館で借りた本がだいたいいつも百冊くらいあります。

好きな本は購入して家に置いておきたいなと思ったりしますが、私の場合、実際購入した本はなかなか開かなかつたりするので、私は読みたい時に図書館で借りて読むことにしています。一度読んで本も読みたくなったらまた借りるので、自宅の本棚の本よりも図書館の本をくり返し読んでいます。

絵本もたくさん借ります。子どもの成長に合わせて、その時に読みたい本を読みたいだけ楽しむことができます。いろいろな本を借りると、その中で子どもが気に入って何度も読んでと持つてくる本があるので、その本はお誕生日のプレゼントにしたりします。

学生や社会人のころは小説も読みましたが、今は実用的な本が多いです。本にたくさん教えてもらっています。何か作りたければ図書館、何か知っていたら図書館といった具合です。私にとってはなくてはならないものです。子どもの運動会が近づけば速く走れる本、


プールの始まれば水泳の本、どんな絵本がいいかなと思ったり絵本を紹介してくれる本、子どもが料理をしたいと言ったら子どものために読みたい本を借りていると、あつという間に三十冊になってしまいます。

わたしと 
図書館
唐松由利子

子どもたちも図書館が大好きです。娘は、好きなシリーズの本を「ここからここまで全部借りる」と言ったりします。本屋さんで言われてもきいてあげられないけれど、図書館なら「いいよ」と言えます。私は娘の疑問に対して「それは本で調べてみたら」と言うことがあります。娘にはまたかという顔をされますが、そのうち娘が、「知りたいことがあるから図書館で調べてくるね」なんて言ってくれたら嬉しいな、なんて思っています。

人との出会いと同じように本との出会いも縁だなと思うことがあります。

子どもたちも図書館を利用してたくさん本と出会ってほしいなと思います。

● 

子どもの本まつりを終えて

子どもの本まつり実行委員会

委員長 服部 雅子

私たちは、この事業に六人で市民実行委員会を立ち上げ、図書館の児童担当のみなさんと一緒に活動しました。きっかけは、第2期子ども読書活動推進計画策定懇談会の一員だったことでしたが、みな地域で長く、子どもの本に関心を持ち、子どもたちの文化活動を続けてきた人ばかりです。

私たちにあって「子ども読書活動推進計画」は大きな意味を持つものでした。市民としての活動をすればするほど、本当の意味で子どもたちの読書環境をよくするには、市としての取り組みこそが必要だと痛感してきたからです。

四月から準備を始め、内容、タイトルを決め、参加者の募集、出演交渉、経費の試算、広報の準備など、大小二十回近い会議と打ち合わせが行われました。このような形の図書館と市民の協働はかつてなかったもので、日常業務をなさりながら市民とこまめな連絡をとりつつ仕事を進めるのは職員の方にとってきつとたいへんだったことでしょう。私たちも様々な発見があり、貴重な体験ができました。前例のない事業は、参加の呼びかけも難しいものですが、思いを同じくする多くのみなさんが協力を申し出てくださり感激しました。計画の周知と市民活動の交流を目的として企画したパネル展示には、市民の方からは個性あふれるすてきなパネルが集まり大好評でした。また、学校、図書館、児童館、保育園ほかのパネルには、この計画に対する市としての意欲的な姿勢が示されていて、私たちが一番嬉しかったところでした。

当日の冷たい雨では、小学生の参加が難しかったのは仕方ありませんが、多くの市民と乳幼児の親子が集まり大盛況でした。お客様、きばきと動いてくださった当日スタッフ、快く講演と対談を引き受けてくださった内田麟太郎さんと宮川健郎先生、ご多忙な中すてきなイラストのポスターを作ってくださいった川田ひささん、みなさんに心からお礼を申し上げます。

編集後記

冷たい雨が降りしきる中、パネルなどの道具類を搬入しながら、子どもたちは来てくれるかな…と曇天を見上げた、「子どもの本まつり」当日の朝。始まってみれば、会場内は元気な子どもたちの笑い声が、そこかしこで聞こえ、午後の講演会が始まるころには日が差し込むほどに天気も回復。参加してくださった方々の笑顔と共に、翌日の筋肉痛も良い思い出です。